

## 災害支援ナースの活動報告

派遣期間：輪島高校避難所（輪島市）：初陣：2024年1月12日～15日

兵庫県立はりま姫路総合医療センター 前田恵子

輪島高校は地震後の大規模火災があった輪島朝市から1キロ圏内に位置し、当時約280名の方が避難されていた。ライフラインは発災時全て絶たれていたが、5日目に電気が復旧し校舎内の暖房機器使用が可能であった。石川県庁から車で輪島市に向かう道路は多くが崖崩れや陥没で寸断され、迂回路を重ね到着までに5時間を要し、避難所に到着した時はすでに16時を過ぎていた。場の医療統括を行っていたジャパンハートの看護師から避難所の状況説明を受け、今後の活動についてミーティングを実施した。今回は兵庫・滋賀・福井から派遣された8名の災害支援ナースで活動となり、避難所内の教室、体育館（剣道場・武道場含む）、感染症エリアに担当を分け活動を行った。感染症エリアはDMATによりゾーニングや搬入搬出ルールがすでに作成され運用されていた。本活動は避難者の健康観察が目的とを考えていたが、その為の避難者に関する情報が感染症エリア以外は大幅に不足しており、避難者の情報収集、各場所での配置図を作成、基礎疾患など情報を加えた。その中で継続的に健康観察が必要な方をピックアップし、情報用紙を作成した。継続観察が必要と判断した方の中には、医療機関救急搬送、受診の促し、DMATによる診療など医療介入に至った方もおられた。また用紙を作成する事で夜間の継続観察がスムーズに行え、24時間看護師による健康観察が実施された。その他に避難場所の環境調整、高齢者のADL低下予防と観察、感染症予防で手洗いや換気に関する掲示やルール作成、DVT予防の掲示や声掛け、ラジオ体操導入、うがい・歯磨きに関する掲示、看護師が常時避難所に居る事を巡回や掲示物でお知らせし、昼夜問わず相談していただける仕組みを作成した。避難所は病院ではなく避難者の方の生活の場であり、どこまで踏み込んで関わればよいのか苦悩した。短期間ではあるが日々巡回し声をかけ続けた結果、関係性が出来ていない初日には大丈夫と言われたが、実は定期薬の使用が出来ていないと相談され、DMATに診察依頼ができ救急搬送を免れた事例もあった。限られた活動期間でありもどかしさが残る事もあったが、必要と感じた活動は実施でき後続に引き継げたと振り返る。



